

小特集「情報システム」の編集にあたって

魚 田 勝 臣†

本号で小特集を構成した3篇の論文は「情報システム研究会」の活動を通じて集められたものである。すなわち、同研究会の呼びかけに応じて、研究会やシンポジウムで発表された論文が著者により加筆のうえ寄稿され、論文誌編集委員会に付託された。専門分野の関係で'90年10月の委員会において私が世話役をおおせつかった。論文誌編集委員会では、同研究会の希望で一般の論文とほぼ同じ手続きにより査読し、本年10月までの委員会で承認された論文で小特集を編成した。これに間に合わず採録されたものは通常論文として掲載される予定である。

今回の小特集論文は、論文誌の論文となり難いと言われている情報システムの分野で採録された論文であり、先例の一つと考えてよい。とくに前二篇、

初瀬川氏による「経営活動における情報システムの評価事例」および、

高橋、坂内両氏による「システム監査の一実現方法—統制マトリックス法の提案」

は、これまでの平均的な論文誌論文と趣を異にするものである。内容もさることながら、主張点の選定と実証、展開の方法など、書き方の見本としても参考にしていたきたい。また、最後の一篇、

幡野氏ほかの「ラピッド・プロトタイプングによる情報ネットの検討手法」

についても、利用者側に立ったもので同様な意義を持つものである。

さて、情報処理学会の活動には、ニーズ側、シーズ側および研究側の三つに立脚したものがあると考えられる。これらは“かなえ”のようなもので、どれが弱くても健全な発展は望めない。学会の場合、活動の活発さは機関誌や論文誌に掲載される論文の数に端的に現れる。そういう観点でニーズ側の代表格たる情報システム関連の論文を眺めると極端に少ない。コンピュータ学会ではなく、“情報処理”学会という名にふさわしい学会にするために、ニーズ側に立脚した論文を増やすことが学会の発展に不可欠であると信じ

る。

この種の論文が少ない理由を考えると、

- ①関連の会員数が少ない。
- ②ローカルなテーマが多く論文としてまとめにくい。
- ③論文の先例が少なく、どう書けば採録されるのかわからない。
- ④会員が知りたい本質的な部分は経営の根幹にかかわるので公表できない。よって核心をつく論旨を展開できない。
- ⑤査読適格者が少ない。

といった項目があげられると思う。このうち①や⑥については、むしろ活発化の必要性を示しているものとする。④については特許で根元を押えられるハードウェア関連が有利であるのは否めない。しかし、ソフトウェアについては情報システムと同様の環境条件にありながら工夫が加えられ成果が公表されている。こうして考えていくと結局は②および③が理由だということになる。この状態を打破するためには地道に論文の先例を積み上げていく必要があり、今回の小特集はこのような意義をあわせて持っている。

戦略情報システムを例にあげるまでもなく情報システムに対する企業などの期待は大きく、それにつけて特徴のあるシステムが構築されている。それらが論文としてまとめられて採録・掲載され、議論が盛んになることを切に望む次第である。情報処理学会においてニーズ側の活動が活発になることにより、その要求がシーズ側や研究側に正確に伝わり、よりのを得たシーズが研究開発されて供給されるようになると思う。

幸い情報システム研究会の活動は活発であり、これからも特集号を企画する機会があると思う。普通号での論文も含めてこの分野での論文をふるって寄稿されるよう望んでやまない。私も同研究会の連絡委員としてうに述べた考えのもとに微力を尽くしたい。

この小特集の編集にあたってご協力いただいた査読者、著者および情報システム研究会の方々に満腔の謝意を表す。

† 専修大学経営学部情報管理学科